校長室だより～燦燦～ №９２１

終わり方

2023.12.11

１６年前になる。あと１か月ほどで教諭という役職から離れることがわかっていた時期があった。やろうと思っても、もう国語の授業ができなくなる。やりたくても教諭として働くことはなくなる。そう考えると、心置きなく、有終の美を飾りたくなるところだが、実際はどうだったのだろうか。

目の前の仕事量に負けていたように思う。国語教師としての“最後の授業”は、どんなことをやったのか思い出せない。日々の煩雑さに追われ、気が付けば離任式を迎えていた。あれよあれよという間に、単身赴任の準備をし、引っ越しが終わり、３月３１日となっていた。終わり方としてはよくない。悔いが残る。

あと１か月ほどで、教頭職が終わってしまうという時期があった。だが、これは延期となった。あの２０１１年、平成２３年の３月のことである。次の勤務先はわかっていた。しかし、いつまで延期となるかはわからなかった。４月なのか、５月なのか、はたまた、このまま１年延期なのか。

結局、８月１日の異動となった。４か月間も延期となった。ということは、教頭職として働くことができる期間が延びたということである。いつ異動になるのか、異動はなくなってしまうのか、そんなことに気がいってしまい、せっかくのチャンスを生かすことができなかったように思う。これもまた、終わり方としては非常によくない。

２０２４年、令和６年３月で校長職を辞すことが決まっている。ずいぶんと長い終わり方のチャンスをいただいている。１０月の中旬だったか、ふと完璧に校長職を務めたくなった。それも１週間限定である。長く生きてきた結果、自分のことがよくわかってきた。きっと１週間ももたない。完璧を目指すということは、表現を変えれば演技をするという感覚である。１日目はよかった。２日目になるとあやしくなってきた。３日目からは辛かった。５日間は長かった。完璧に演じることはやめた。

方針を変えた。残りの期間で何が残せるかを考えるようにした。お金は残せない。名を残す必要もない。残したいのは人である。それは、先生方であり、生徒たちである。じっと見つめたり、見守っていても、相手には何も伝わらない。大事なことは、言葉である。それを伝えるタイミングである。

教諭時代、教頭時代のような終わり方はしたくない。退職とか引退という気持ちは全くない。ただ、校長という役職が終わるというだけである。校長だからこそ、できることがある。それをやることで人を残したい。人を育てる。それが教育の醍醐味であり、真髄であろう。今度こそ、いい終わり方をしたい。